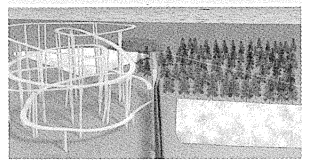
ここから見えるもの



太田　和伸

福屋研究室

設計趣旨

今回の震災は日本に未曾有の被害をもたらし、様々な物を失い世の中の価値観は大きく変化した。人々は自然の力に恐怖し、美しい風景や思い出の場所、そして自然を破壊してまで人間を守る事だけ考えている。
ここには人々の思い出がたくさんあった、日和山でバーウォッチング、初日の出を見た。夏には潮干狩りやサーフィンをた。渡り鳥の群れが飛んでいた。鳥の鳴き声が聞こえた。
しかし3.11の震災により津波が蒲生地区の風景を飲み込み思い出の地は荒地となった。そして人は新しく町を造る、ここの思い出を消すかのように。
本計画ではこの価値観の変化、世の中の考え方に対して本当に守るべきもの、失ってはいけないものを考え、感じられる場所を提案する。ここに残すべき物として蒲生干潟を中心とした自然や生態系震災により受けた被害を確認できる場所とし、これらを後世に伝え残せる場所を計画する。

Site

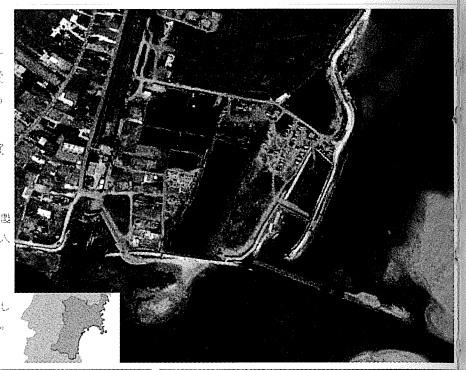
蒲生地区は3.11の震災によって多大な被害を受けた蒲生地区である。

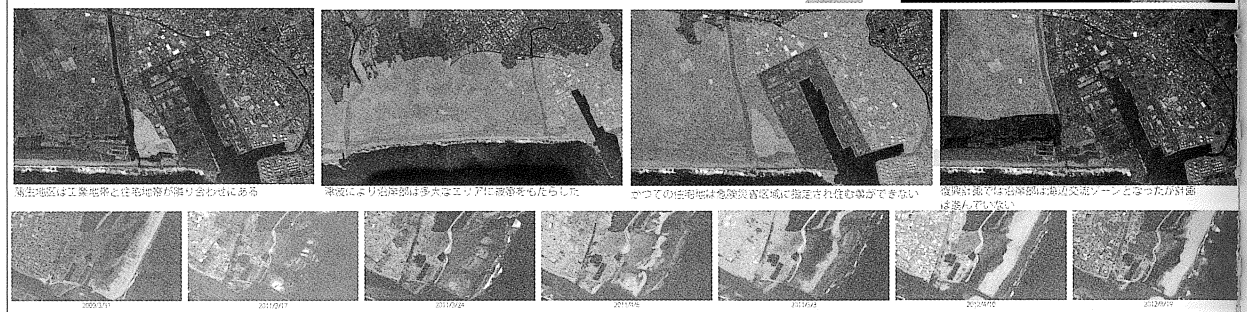
蒲生地区は仙台港や蒲生干潟があり人と海との関係が近い地区であった。しかし今回の震災により蒲生地区は壊滅的な被害を受け危険災害区域に指定され、新たな住居が建築する事ができなくなり今後人が住む事が出来ない地区となり蒲生地区は工業地帯と変わる。だが蒲生干潟は当初回復を見込めない程の被害を受けたが、時時刻刻に回復に向かい蒲生干潟に生息する生物や渡り鳥が戻って来ている。

現在、本計画地は住宅の基礎だけが残る風景となった。しかし自然は回復に向かい、干潟の回復の様子や戻ってきた渡り鳥を観察する人々が訪れ、自然の回復、そして震災の爪痕を確認し人々は消失した日和山に手を合わせ石積みを行っている。

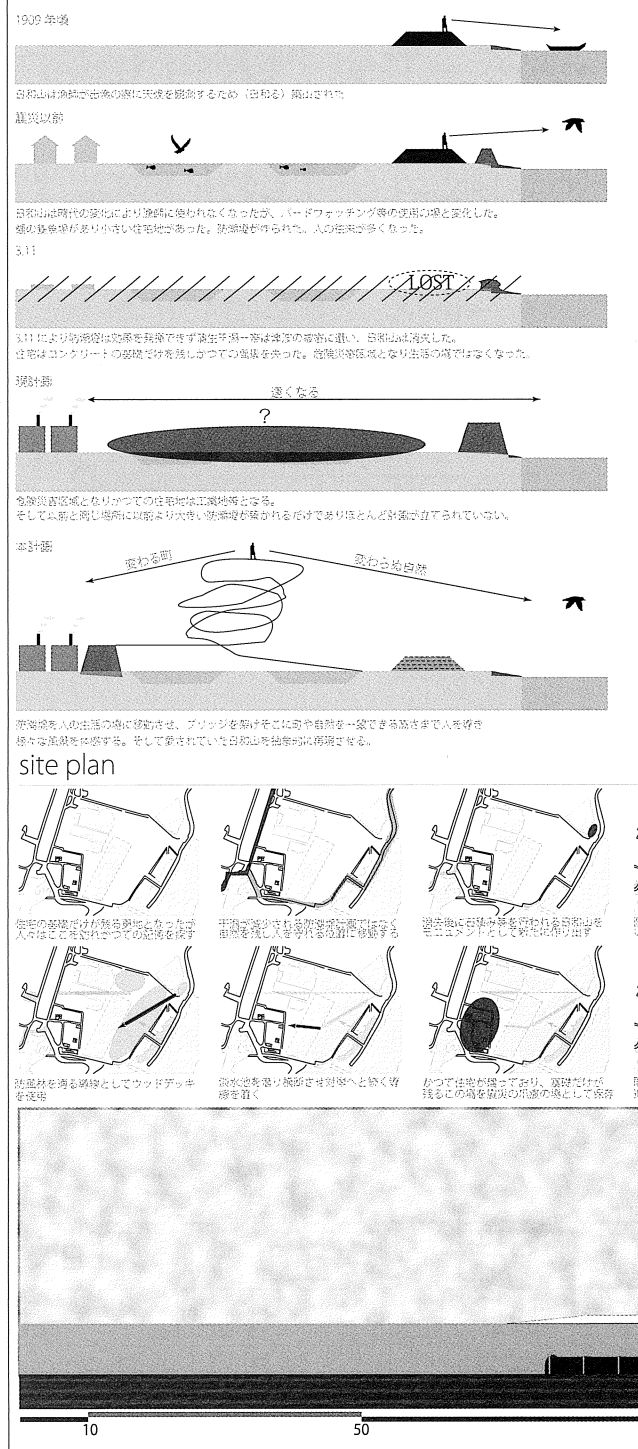
日和山
標高6.05m、山頂部直径約40m、斜面約20mの階段である。江戸時代から明治時代までの間の航海として栄わった当時は航海の目印によってその地位を失い、神聖な場の場へと変化した。そのような時代変化の中で、明治以降に海岸線が埋め立てられ、日和山は陸地化された。仙台湾が埋め立てられ住人の生活の変化と日和山は徐々に利用されなくなった。しかし蒲生干潟のバードウォッチングの場として人々が訪れ、自然山登りの場として利用されていた。

蒲生干潟
干潟面積の約2割が残されており、満ち干潮の繰り返しにより蒲生干潟がある。この場所は、干潟時に現れる湿潤な干潟や潮汐の影響地帯と一体となって多様な生態系が生息していた。そのため渡り鳥や野鳥観察などの目的で訪れる国内外の人々の憩いの場ともなっていた。現在は開発しつつあり少しずつではあるが水を戻して行っている。



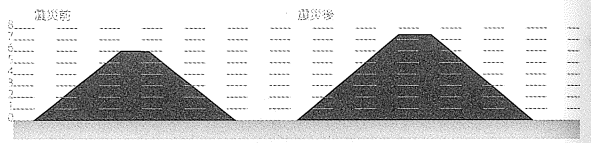


Program



防潮堤 plan

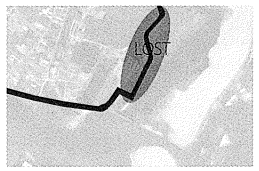
蒲生地区は2009年まで人工的な防潮堤は存在せず蒲生干潟と住宅地は自然の形で繋がっていた。
しかし蒲生干潟を埋め立て人工的な防潮堤が築られ、この防潮堤も今回の震災では効力を発揮出来ず破壊により破壊された。



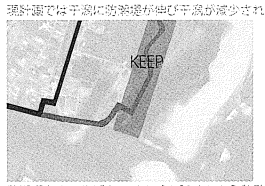
今回の震災の被害を受け防潮堤を7.4mの盛土な防潮堤が計画された

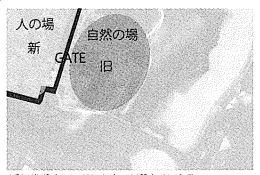
この計画により蒲生干潟は1haも減少してしまう。
調水池である鹿乗排水路地域は、干潟面積の3ヶ所が失われた現状では非常に重要な環境調査であり、調水地に開発する際に対しても検査が出るであろう。

青色線が震災前の防潮堤
ピンクのエリアが干潟（一部調水池）が消失する



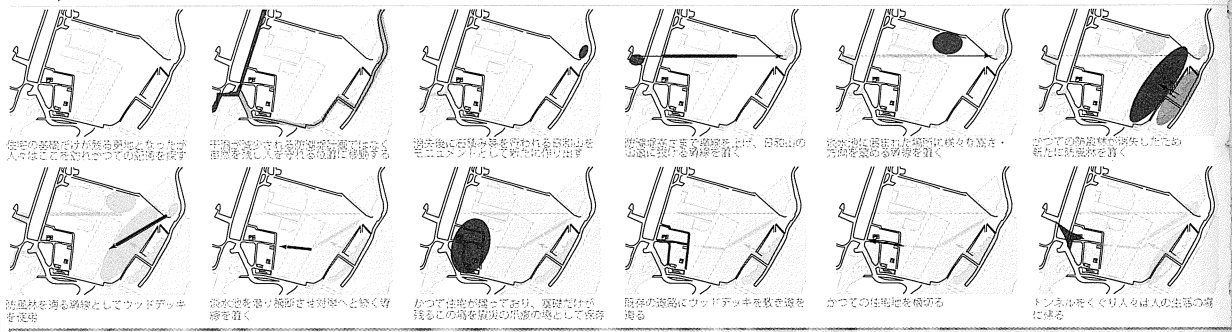
現計画では干潟に防潮堤が地が干潟が減少される





防潮堤を人の生活を守り自然を残せるよう移動させ防潮堤をGATEとして場を分ける

site plan


復興の為盛土が無数建設されたが、日和山の為に盛土をしない
防潮堤を人の生活の為に移動させ、ブリッジを架けそこに苔や自然を一緒できる場所を作って人を導き様々な景観を体感する。
盛土地区は工業地帯と住宅地帯が隔り合わせにある
盛土地区は工業地帯と住宅地帯が隔り合わせにある
盛土地区は工業地帯と住宅地帯が隔り合わせにある